



「城北の家」吹き抜けのある食卓。
南に近接して平屋建ての住宅があるため1階部分の窓は小さくし、冬の陽射しは吹き抜けから。奥は壁で囲まれた落ち着ける居間。

■DATA／設計監理者
有馬 讓 (ありまゆずる)
1967年生まれ
一級建築士事務所 幹自然住宅工房
兵庫県姫路市伊伝居340-3
tel 079-221-7223
E-mail arima@js8.so-net.ne.jp
<http://www.eonet.ne.jp/~kankan/index.htm>



幹自然住宅工房の仕事

家族を温かく包み込み 時の中で美しく成長する 住まいをつくりたい

「建築っていったい何?」

「何のためのものづくり?」

自分に問いかけたその答えは…

「建て主」「職人」「建築士」…

家づくりに関わる人々が心を込めてつくった家は、
住まい手に大切にされ、愛着のある住まいとなり、
その街の風景となる



「アプローチから見た、自宅兼事務所の「城北の家」。外壁は、乾いた土壁のイメージの塗り壁と杉板張りで仕上げられています。自然素材を使ったシンプルな外観。



「岡本の家」の玄関ホール。いろいろな家具や雑貨で彩られています。窓の外の緑も計画的に配置され、玄関をより印象的に。

本当にやりたい仕事は
こんなことじゃない!

28歳で独立して自分の設計事務所を持つてから今年で10年。それと同時にオープンシステムでの家づくりに関わってからも同じ年月が経ちました。

学生時代に「建築」を志し、大手の設計事務所に入社。時代はバブルまっただなか。超高層ビルやマンションの構想、都市再開発事業などの仕事をしました。当時「バブルの塔」と呼ばれた高層ビルをいくつ計画したことでしようか。

野球ドームの設計コンペの企画をしていたときに起きた阪神大震災。

何年も「建築」に関わってきたけれど木造住宅のことを何一つ知らない僕は倒壊した家を前に何もすることができませんでした。

「本当にやりたい仕事はこんなことじゃない!」心の中でつぶやきました。子どもたちから絵を描くのが好きでした。手でものをつくるのも大好きでした。小さなころ住んでいた古い木造の家を改築したときの大工さんの姿や木の匂いの記憶が蘇りました。「その手を使って人々を幸せにするのが仕事だよ」と心の声が聞こえました。

楽しかった工務店での仕事

「年ほど勤めた設計事務所を退職し、下町の小さな工務店に転職。明るい太陽の下、大工さんと木の匂いに囲まれた現場の仕事は本当に楽しい毎日でした。

小さな工務店だけに、営業からプランニング、見積り、契約、実施設計、予算管理に現場監督など、工務店にとって必要な仕事を任せられ、短時間でいろんなことを一気に吸収し学ぶことができました。実際に建て主さんと対話を重ねながら家づくりをすることは楽しく、毎日がワクワクの連続でした。

しかし同時に「価格の見えない家づくり」「職人も施主も幸せにならない家づくり」を実感することにもなりました。



誰も楽しそうじゃない家づくり？

工務店には種類の見積りが存在します。建て主に見せるための見積書と、実際に工事にかかる本当の費用のわかる実行予算書。見積書と実

行予算書の差額が工務店の粗利益となります。この粗利益を多く残す現場監督ほど、社長にとっては有能な社員となります。

どんな良い工法をうたっているか、実際にかかる費用を安く済ませるほうが工務店の利益は上がります。職

人には少しでも安く仕事をさせ、そして建て主には実際にかかる費用を絶対に見せることはありません。

このやり方では「職人と工務店」「工務店と建て主」は決して良い関係にはなれないと感じていました。実際に職人は常に愚痴を言い、建て



「岡本の家」キッチン横の家事コーナー。収納とはいろんなものに住所を付けてあげること。机のまわりの決められた場所に、さまざまな本や書類、趣味の小物、掃除道具などが取まっています。

主はできた建物には満足しても追加工事費でもめることがあったり…。間に挟まれた（現場）監督も決して楽しそうではありませんでした。

建築士として独立

そしてオープンシステムとの出会い

工務店での仕事をしていくうちに、「家づくりに携わるすべての人々が幸せになる」家づくりがしたいと強く思うようになりました。

そしてその方法はすでにわかっていた。実際にかかる工事費や経費をすべてオープンにすることだ！」と。

そこで工務店の社長に、実際に必要な経費、設計費、本当にかかる工事費すべてを建て主にオープンにしてみても、と何度となく提案しました。しかし、その工務店の方針が変わることはありませんでした。

この経験が建築士としての独立、

家族みんなで岡山の材木市場まで買い付けに行った杉の構造材。友だちみんなで塗った珪藻土の塗り壁。大工さんの手づくりテールや本棚。1枚の写真の中にもたくさんの忘れられない物語があります。



2002年に完成し、約7年がたったスキップフロアーの家。毎年、年の初めに私たち設計士をはじめ大工さんや電気屋さんなど、工事に関わった仲間がこのお宅に家族を連れて集まります。まるで昔からの友人のようです。

そしてオープンシステムとの出会い、そして現在へと繋がっていくこととなります。

山中氏によるオープンシステムが産声をあげたころ、僕は「分離発注方式の家づくり」で「家づくりに携わる人々を幸せにする」と決意していました。オープンシステムとの出会いは必然かもしれません。

同じ志をもった仲間や、以前の建

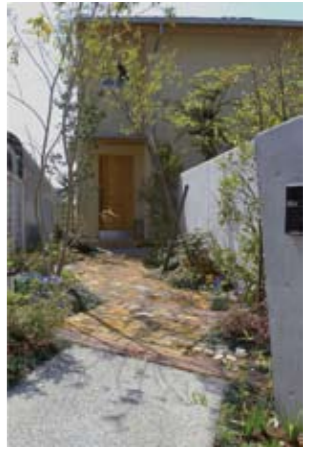
て主に助けられた最初の受注から10年。経営的には苦しい時期もありましたが、自分なりにがむしゃらにやってきました。そして現在までに8棟の建て主との出会いがあり、その家づくりごとにさまざまなドラマがありました。それぞれに思い出はありますが、その中でも思い入れの強い1つの家づくりを紹介します。

「家づくりに携わるすべての人々が幸せになる」家づくりがしたい



神戸市 岡本の家

出合いはお見合い



たくさんの緑に囲まれ季節ごとに表情を変えるアンティークレンガと打ち放しコンクリートの壁でつくられた玄関までのアプローチ空間。ワクワクするような場所になっています。

兵庫県神戸市東灘区。駅に近い車の通りのない閑静な住宅地。道から少し奥まった敷地に建つ木造2階建ての家です。

2002年、建て主との出合いはオープンネット(株)が主催する「OMIJI」というシステム。家づくりを希望する建て主がホームページで申し込むと設計する意思のあるオ



ロフトから見たダイニングキッチン。お伺いするたびに美しくなっていくようです。

ープンシステムの設計事務所と「お見合い」することができるよう方です。めでたく成立する場合は破談する場合があります。幸運なことに7〜8社が参加した中で当社と設計を進めてゆくことになりました。

建て主は当時30代後半の小さなお子さんのいるご夫婦です。熱心な奥さんとは何度も打ち合わせを繰り返し、間取りの検討、イメージの検討を重ねました。

上質な暮らしを楽しむ ギャラリーのような家

建て主の要望に対して建築士はその答えを探そうとします。複雑で多様な要望でも、建て主との信頼関係があれば、見えない答えへと繋がるように、ひとつひとつ検討を重ねました。

討を積み上げ、また壊し、また積み上げてゆくという作業を通して一つの空間としてつくりあげることができ

ます。建て主とともに積み重ねていったこの作業の結果、この家づくりは自分の中になかった新たな答えとなり、想像以上の上質な空間となりました。

良い建て主との出合いは建築士を成長させることができるのだと思います。

完成してからも何度かお伺いする機会がありますが、お伺いするたびに家が雑貨やキリムなどで美しく飾られ、まるでギャラリーのようになっていくことに驚かされます。

毎回、現場が終わるころには自分の建物のように思うものですが、引き渡し、年を重ねるごとに建て主の愛情をいっぱい受け、建て主の大切な家となります。

愛着のある家が増えれば、愛着のある街並みとなり、日本の風景が変わるかもしれませんね。



1階ホールは、テラコッタ風のタイルに珪藻土の塗り壁の空間。大きなキリムや家具、雑貨が飾られ、まるでギャラリーのように。



ご主人の蔵書を収納するための造り付けの本棚。奥は書斎デスク。

間取り図



1階



2階

※キリム：中近東の遊牧民たちが織る織物

姫路市 城北の家

日々の生活の記憶が
積み重なり家となる

兵庫県姫路市の北部。まだところどころに田畑の残るのどかな住宅地に、僕の事務所兼自宅があります。現在は、家族5人の生活の場、設計の仕事場としてフル活動しています。お客さんが見学に来られることもあり、その時は大片付けしてモデルハウスになったりもします。

自然素材をふんだんに使った我が家に住み、5年が経ちました。杉の床板にはたくさん小さな傷もありますが、よく使うところは銚色に光っています。日ごろの手入れの賜物と言いたいところですが、本当は子どもたちの靴下の裏のおかげでしょうか。

珪藻土の塗り壁にも時の記憶が染み込んでいます。子どもの手の高さの壁は、ほかの場所よりも少し黒ずんでいます。汚れなのか風合いなのか。



か…。日々の生活の記憶が確実に積もっていきます。

古くなるほどに味わいを増す自然素材に囲まれて暮らせることは、本当に豊かな生活なのかもしれませんね。この家が子どもたちにとっての原風景になってくれればと思います。そしてそれが私たちの大切な思い出になっていくでしょう。

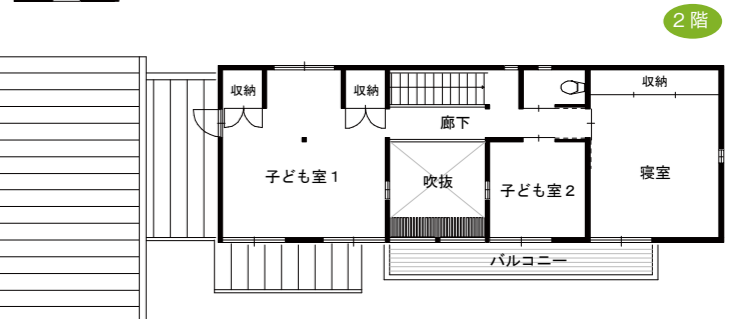
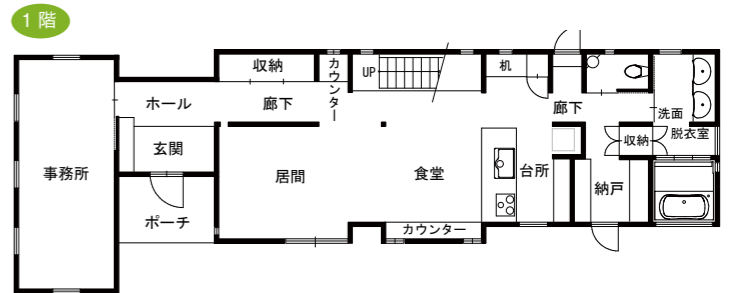
家族の気配がどこにいても
感じられる家

自分の家の設計という力が入るだろうと思うかもしれませんが、常に抱えている仕事との同時進行なのでなかなか時間をかけることができません。



吹き抜けと2階廊下。近くの山の杉をたくさん使用することで「地産地消」に。奥の男の子2人の子どもスペースには扉がありません。仕切りや扉は大きくなって必要ならばつくれば良いと思っています。

■間取り図



雑木林の小路のイメージでつくられたアプローチ空間。季節ごとに表情を変えて出迎えてくれる樹木や草花があると家により印象深く感じられます。

古くなるほどに 味わいを増す自然素材に 囲まれて暮らすことは、 本当に豊かな生活

ません。すべての仕事が終わってからは簡単なスケッチを描くのが精いっぱいでした。

結局ちゃんとした図面は描けないまま工事は始まり、工事監理も自宅の現場よりお客様の現場が最優先でした。生まれ故郷に戻って初めての職人たちとのオープンシステムで、

決してプロとして満足のゆく工事監理ではありませんでしたが、家族みんなで参加しながらつくっていくことができ、完成したときの感動は忘れることができません。予算を極力抑えながらでしたが、自然素材や再生利用できる素材でつくったこの家は、その中に生活のすべてがすっぽり収まって、家族の気配がどこにいても感じられる家となりました。

この家が幹自然住宅工房のベシツクハウスと呼べるのではないかと最近思います。



食堂の吹き抜け。ここを通して家族の気配がどこにいても感じられます。階段下にあるのは蓄熱暖房機。断熱性能を高めることにより、これ1台とコタツで真冬でも快適に過ごせます。



2階の子ども部屋。床板は杉。下地の合板は使わず厚みをちみりに。壁は予算をけすに土佐和紙貼りに。

明石市 大久保の家

対話を重ね
その人らしい家に



輸入木材の梱包に使われていたパレットの木材を解体して、内装壁に再利用。建て主のアイデアと大工さんの柔軟な対応に驚きました。それが今ではこのお宅のアクセントになっています。

2006年の夏に完成したこのお宅は、区画整理された静かな住宅地の一角にあります。付き合ひのある自然素材や輸入建材を扱う建材店のスタッフさんの紹介で出会ったこのご家族は、30代後半(当時)のご夫婦とお子さん3人の、賑やかな5人家族。楽しい家づくりとなりました。

僕的设计する建物には、難しいコンセプトやテーマはありません。使う材料もそう多くはありません。無垢の板や漆喰や珪藻土、紙ぐらいで。でもできあがる建物はそれぞれ違ったものになります。建て主と対話を重ね、その人の要望を汲み取り、僕はそれを形にする努力をします。

同じ塗り壁でも左官職人に「もう少し白く」「こてムラをもう少し残して」とか、大工さんには「窓の額



ちょっとした本の飾り棚も建て主のアイデア。設計士と建て主と職人さんでつくり上げる作業は本当に楽しいです。

縁はもう少し細くしよう」「額縁の角の面取りは少し小さくして」といった細かな指示を出します。図面だけ渡して「ハイ、よろしく」では決してその人らしい、いい家はできません。

インテリア雑誌に
出てくるような家になった

僕は職人と一緒になって現場で試行錯誤してつくりまます。建て主も職



こだわりの檜材のダイニングテーブルを中心に広がる建て主の世界。雑貨屋さんやインターネットで1つずつ探し出した雑貨や家具たちによってつくり上げられていく。たまにお伺いするのが楽しみです。

人と建築士と一緒に考えて考えます。

この家の建て主はインテリアの動物的センスがあるのか、設計の初めころからキッチンの対面の壁(それもコンクリートとガラスブロックの構成)のイメージの模型をつくって持ってこられたり、輸入木材の梱包材に使われていた荒木を見て、それを内装に使いたいと大工さんに言ってみたり、フランスからの輸入ガラスをご自身で手配され、建具屋さんに使ってもらったり。一見バラバラに見えるこれらが完



かわいらしい雑貨やアンティーク小物で飾られた玄関ホール。まるで雑誌に出てくるインテリアのよう。耐水性のある木材でつくられた玄関の床も面白い。



設計の初期の打ち合わせに持ってこられたキッチンまわりの模型と水彩画。木の型枠で固めた木目の打ち放しコンクリートの壁とガラスブロック。その横の板張りの壁。ほぼこの通りにできあがり、びっくり。

間取り図

1階



おわりに

僕は自身が手がけた建物のことを「作品」とは呼びません。僕の仕事は「家」をつくることだと思っています。人の生きる原点としての「住まい」をつくることです。

これからは、10年間がむしろにやってきたことをもう一度腰を落

ち着けて、生活する側の視点から「住まい」についてよく考え、今までよくキーワードにしてきた「愛着」や「手ざわり」、「居心地のいい」や「気持ちのいい」という雰囲気といった言葉の家づくりをしていこうと思っています。ローコストでも木の温もりのある豊かな空間をつくり続け、いずれは住宅建築家と呼ばれるようになればと思います。



↑建て主が雑貨屋さんで見つけた骨董のドアノブ。これらひとつひとつがその人らしい家づくりになっていく。

→建て主自ら手配したフランスからの輸入ガラス。それを建具屋さんで現場で手渡し、吹き抜けに面する窓に使ってもらった。

